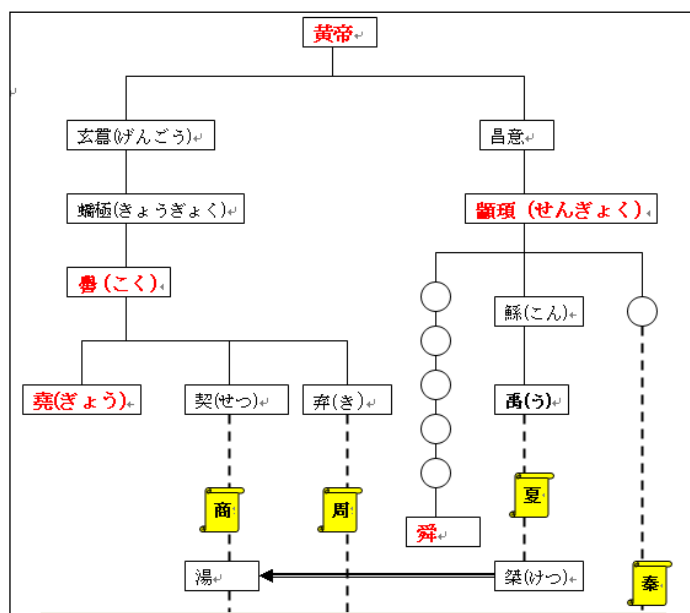


夏殷周漢王朝の始まり

～五星集合は天命

「殷周秦漢（インシュウシンカン）・・・」という語呂合わせで中国の王朝名を暗記した人も多いでしょう。私たちが世界史で習う中国最初の王朝は殷（＝商）となっていますが、現在、その前の夏王朝の存在を示唆する遺跡が発掘されつつあります。公式な中国最初の歴史書である『史記』は、司馬遷(BC145?－BC87)によって BC90 年頃成立しました。それは 12 本紀、30 世家、8 書、10 表、70 列伝から成り全部で 130 巻、52 万文字という大著で、単に王朝の推移の記録だけではなく、暦書・天官書などをも含み、百科事典ともいえます。その後の中国の歴史書のお手本となりました。

その第 1 巻である「五帝本紀」によると、最初は五帝の時代です。



五帝とは黄帝－顓頊（せんぎょく）－帝嚳（こく）－帝堯（ぎょう）－帝舜という 5 人の理想の聖帝を指します。黄帝は最初天子で、中華文化産業の始祖だそうです。第 2 代第 3 代には特筆する事件は

ないようですが、第 4 代の堯は古来中国で理想の聖天子と言われ、義

氏と和氏を天文官に、鯀（こん）を治水工事責任者に任じます。羲氏と和氏は日月星辰を観察して春分・夏至などを定め、暦作りに成功したそうですが、鯀は9年やっても黄河の氾濫を収められず責任を取らされたそうです。その頃は太陽が10個あり、交代で地上を照らしていましたが、ある時に10個が一度に地上を照らすようになったために地上は灼熱地獄となりました。堯は弓の名人である羿（げい）に命じ9個の太陽を打ち落させたそうです。これにあたる天文現象は不明ですが、堯の時代には洪水や異常高温などの天災に襲われたのかもしれませんが。温暖化対策に成功して世界を救ったのならまさに聖天子ですが！

堯から禅譲された舜は鯀のできなかった治水工事をその息子の禹に引き継がせます。禹は13年間自宅に戻らず工事の現場監督をして黄河治水に成功したそうです。

夏と商

舜から禅譲を受けた禹も五帝に準ずる聖君と敬われ、その後は息子の啓が継ぎここから世襲が始まります。これが夏王朝で、桀という暴君で終わります。次の商（殷）の初代は湯という聖君で、桀を放伐し諸侯に推されて天子の位に就きますが、最後の王は紂という暴君です。中国古代王朝は聖天子で始まり暴君で終わるというのは定番です。夏の帝は初代の禹、2代目の啓、最後17代の桀を除けば無名で、しかも暗愚な帝王たちです。第3代太康は国を追われ、第5代の相のときには后羿（こうげい）、寒浞（かんそく）による反乱が起こり、夏は一時中断します。

商とその次の周は帝嚳の子孫と称しています。また始皇帝を輩出する秦は夏と同じく帝顓頊の子孫と称しました。周時代には夏の末裔は杞、商の末裔は宋という小国が実在し、周末の春秋戦国時代まで続いています。ただし夏商周の版図は黄河中流を拠点とするもので、中国全土を占めていたわけではありません。

夏はいつころ？肝心の年代はわかりません。BC2070年頃～BC1600

年頃と中国では言われているそうですが，まだ文字がなく歴史書はすべてずっと後の世に書かれたものです。10 世紀に書かれた《太平御覽》卷七引《孝經鉤命訣》に"禹時五星彙彙如貫珠，炳炳若連璧"禹の時代に五星が連なり輝いた」という伝承が記載されているそうです。この文の信憑性には問題がありますが，五惑星の集合の記録と考えてみましょう。実は p ** に述べるように BC1953 年 2 月末に 6000 年間で最もコンパクトな 5 惑星の集合が起こっています。日の出前，東南の低い空に水金火木土がひきしめ合って集まっているのが計算から求まります。当時の記録は世界中どこにもありません・・文字がないから当然ですが。もしこの伝承がこの天象を指しているなら，禹は BC1950 年ころの人となります。ユダヤ・アラブの共通の先祖であるアブラハムや古バビロンのハンムラビよりも前です。



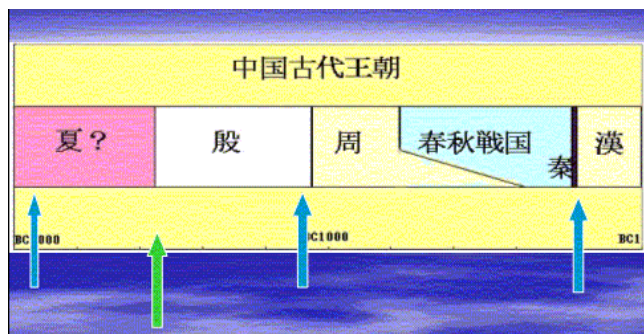
夏の年代を知るためのもうひとつの天文現象は日食です。第 4 代仲康五年に起こったと伝えられている日食の日付を「紀元前 20 世紀，19 世紀の秋に華北で見た皆既日食・金環日食」として日食ソフトを用いて探してみると BC1961 年 10 月 26 日と BC1903 年 9 月 15 日が見つかり，どちらも皆既食です。4000 年前の日食計算の精度は問題もありますが，禹の在位は 45 年，啓の在位は 38 年という数を加えていく

よりは信用できるでしょう。数字は忘れやすいし、後から書き換えられやすいものですから。

ところで、死罪になった天文官は堯が任じた羲氏と和氏の子孫でしょうから、夏時代には天文官はすでに世襲になっていたようです（わが国では平安中期以降安倍氏、賀茂氏が世襲の陰陽師だったのと同じ）。天文官は最も古い専門技術職だったようです。

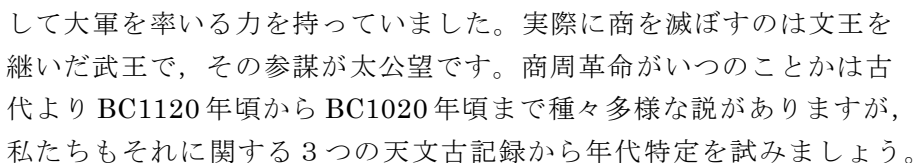
夏から商へ商から周へは放伐（武力革命）による王朝交代ですが、その年代特定には天文資料が重要な役割をはたしています。1996年5月、中国で「夏商周断代工程」という夏・商・周の三王朝にわたる年代を確定しようという大規模なプロジェクトが正式に開始しました。中国の文献史学・考古学・天文学によるこれまでの成果を総動員したもので、その結果、古代王朝の開始年として「夏は BC2070 年，商は BC1600 年，周は BC1046 年」という報告が 2000 年 11 月になされました。<http://www.china10k.com/trad/history/1/12/12z/12z18/12z1801.htm>

特に商周の王朝交代については「これまで 44 の候補があったが、このたび文献・遺跡・天文記録・古暦などから総合的に判定され、BC1046



年 1 月 20 日に確定した。」と記載されています。詳しい導出方法はわかりませんが、その年月日は以下述べる筆者の結果と一致していました。

殷（商）の最後の王は酒池肉林などで悪名高い暴君、紂（ちゅう）王です。西方では未開の蕃国といわれながらも周が次第に強大になってきました。後世の儒家から聖君と讃えられた周の文王は一時紂王に捕らわれ幽閉されますが、贈賄によって許され帰国し、晩年は西伯と



5

は種々の議論もあるようですが、文献考証は専門家にお任せして、ともかくこの記載にそって進みましょう。その解釈にあたっては荒木[8]を参考にしました。

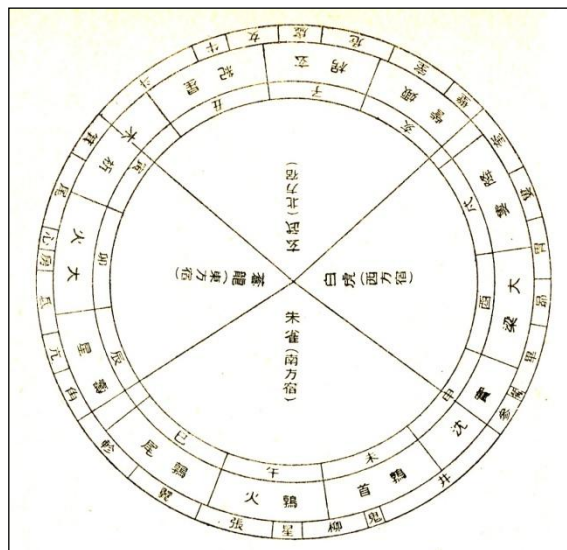
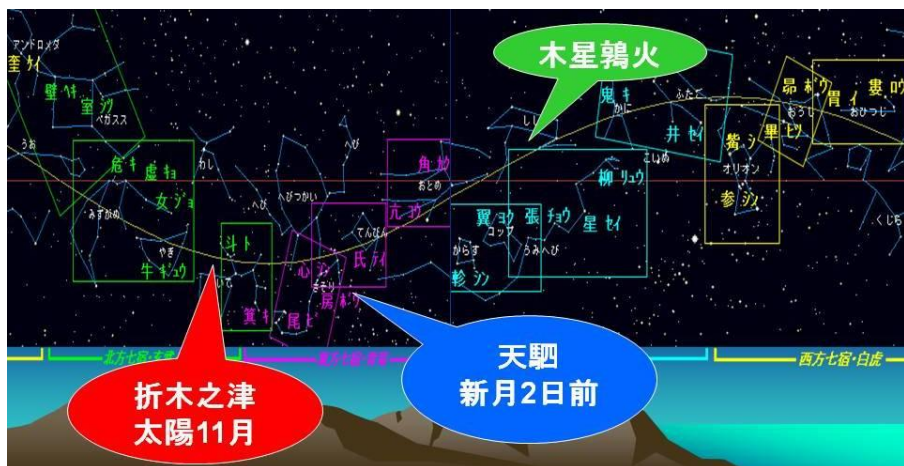


図1-6 中国の星座
最外の円殻は二十八宿
その内が十二次である

鶉火、天駟、析木とはいずれも天球上の位置を表します。古代中国の星座としては白道に沿う二十八宿、赤道に沿う十二次、さらに多数の天官の役職に関するものがあります。現在の星座では鶉火はしし座、天駟はさそり座、析木はいて座あたりとなります。1年で天球を1巡する太陽が「析木之津」にいるのは現在では1月初ですが、歳差のため紀元前11世紀では11月末から12月初です。月は28日弱で天球を1めぐりするので「天駟」に在る日は、太陽と同方向すなわち新月の2〜3日前となります。歳とは木星のことで、12年弱で天球を1めぐりし、紀元前11世紀に「鶉火」に在るのはBC1071年、BC1059年、BC1047年、BC1035年、BC1023年の夏から翌年の夏までです。したがってこれらの条件を満たす日はこれら5個の年の11月末に絞られ、そのうちで最も適する日をPCで星図を描いて捜すとBC1047年11月27日となります。



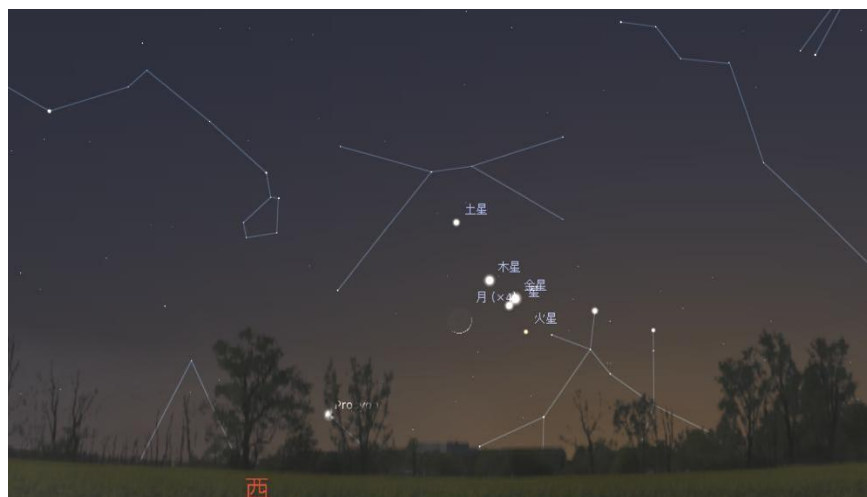
次の記録は商周最終戦である牧野（ぼくや）の戦の日の干支です。

『史記周本紀』にも『漢書律曆志』にも最後に勝利をおさめたのは「甲子の日」と記されており、さらに1976年に陝西臨潼で出土した青銅器, 利?(りき)にも「武王征商, 唯甲子朝」という銘文があるそうです。甲乙・・・癸と続く十干、子丑・・・亥と続く十二支は今日まで連続しているので容易に計算できます。上記に日の後で甲子の日を探すと BC1046 年 1 月 20 日, 次いで 3 月 21 日が見つかります。この両者から周は BC1047 年 11 月 27 日に戦いを始め, 翌 BC1046 年 1 月 20 日に牧野の戦いで商を破ったと考えられます。さらに武王が天位に就いたのは辛亥の日ということから同年 3 月 8 日となります。



3 番目の記録は唐の時代の占星書『開元占経卷十九』の「周将殷伐五星聚於房」という文章です。筆者の五惑星集合の計算結果, BC3000 年から 6000 年間で 3 番目にコンパクトな惑星集合が BC1059 年 5 月末に起こっています。観望条件は非常によく、日没後 1 時間余, 西の空に見えたはずで、多数の人の目に留ったことでしょう。実際に集合した

のはかに座で房宿（さそり座の西部）ではないから誤記事だと決めつけてはなりません。「いつ,どこで」ということは忘れても、事件そのものは長く覚えているということは、現在のわれわれもよく体験するものです。『漢書律曆志』には文王は「受命九年」で没し、武王が殷を滅ぼしたのは「文王の受命より十三年に至る」と記されていますが、果たして受命とは何でしょうか？BC1046 年が受命から 13 年後とすると、文王に天命が下ったのは BC1059 年、その年の 5 月末に起こった五惑星集合こそまさにこの天命にふさわしい！その天象を知った後世の天文官・歴史官は「天命下る」と解釈したのでしょうか。



BC1059 年 5 月 22 日 19 時 30 分

以上をまとめると

BC1059 年 5 月 文王天命を受ける

BC1051 年 文王没、武王継承・・・受命より 9 年目

BC1049 年 武王挙兵するが撤兵・・・上記の 2 年後

BC1047 年 11 月 武王再度出兵する・・・上記の 2 年後

BC1046 年 1 月 牧野の戦、紂王自殺し殷滅亡・・・受命より 13 年

3 月 武王天位に就く

春秋戦国 彗星

周は西方民族の侵入ため BC770 年に都を長安から洛陽に移し、以降は春秋戦国時代と呼ばれます。これから秦の始皇帝による統一まで群雄割拠の世ですが、同時に諸子百家が活躍した時代で学問は非常に活気に満ち大いに発達しました。同じころヨーロッパではギリシア文化が栄えました。天文現象の記載は増え、また信頼性も高くなってきます。日食については p ** へ

『史記秦本紀』には彗星の記事が多く、刺龔（しきょう）公十年、躁（そう）公元年（=BC467）、さらに始皇帝の曾祖父である昭襄（しょうじょう）王の時代（BC300 年頃）に出現の記載がありますが、これらはハレー彗星ではないようです。始皇帝時代には天文記録、特に彗星出現記録が非常に多く、これらを時代順にたどってみると

- ・七年（BC240 年）彗星がまず東方に出て、ついで北方に現われ、五月西方に現われた。…(中略)…彗星がまた西方に現われた。
- ・九年（BC238 年）彗星が現れ、時に天空いっぱいに広がった。…(中略)…彗星が西方に現われたが、ついでまた北方に現われ、北斗星から漸次南に移ること 80 日間であった。
- ・十三年（BC234 年）…(中略)…正月、彗星が東方に現われた。
- ・三十三年（BC214 年）…(中略)…彗星が西方に現われた。

最も重要なのは BC240 年の件で、最古の確かなハレー彗星の記録といわれています。大彗星のほとんどは 1 度だけの来訪で 2 度とやって来ませんが、ハレー彗星は約 76 年周期で回帰します。青年時代の始皇帝（当時はまだ秦王である政）はこの凶を吉に転じようという気持ちで眺めたことでしょう。長谷川[3]に載っている軌道要素にそれに基づいて軌道を計算してみると 5 月上旬、日の出前に東天に現れ、すばるの近くに見えた。その後北に向かい 25 日に近日点通過し、西へ向かいペルセウス座ぎょしゃ座を通り抜け 6 月初旬ふたごの北に達する。6 月 10 日地球最接近の前後には朝晩 2 回見えていたはずです。その後は

日没後西天に見えるようになり、しし座からおとめ座の方向に進み 6 月末まで見えていたはずです。

熒惑守心

『史記始皇本紀』に始皇帝没年 1 年前の何やらアヤシイ天文事件が記されています。

三十六年（BC211 年）熒（けい）惑星が、心星の宿るところに止まって動かなかった。

星が東郡に落ちて石となった。

この事件は始皇帝の死を暗示するように書かれています。翌三十七年（BC210 年）、始皇帝は末子の胡亥（＝二世皇帝）・宦官の趙高らを従え大規模な巡行に出かけます。会稽山（かいけいざん：浙江省）に赴き自分の偉業を讃える石碑を作らせて禹に報告したり、瑯邪（ろうや：山東省）では自ら大魚を射たりしましたが、帰路病に倒れ七月丙寅の日（＝9 月 6 日）に亡くなりました。熒惑星とは火星のこと、心星とはアンタレスのことです。火星はその赤い色から不吉な星とされてきました。特に火星が心宿（アンタレスあたり）で順行・逆行を繰り返してうろうろする現象は熒惑守心と呼ばれ、戦乱が起ったり、君主が亡くなるなど不吉な予告と言われてきました。『宇宙からのメッセージ』（斉藤國治著）には『史記』『漢書』をはじめ数々の天文志の記述をもとに、戦国時代から明時代まで 25 の例が挙げられています（ただし、そのうち 5 例は不発ですが）。その中で重要なのは BC210 年の事件です。この年火星は 2 月～7 月さそり座西部で徘徊し、4 月中旬にも 7 月中旬にもアンタレスに接近します。そして順行に転じた 9 月に始皇帝が亡くなるのです。ところが上述のように『史記始皇本紀』には熒惑守心は前年の始皇三十六年（＝BC211 年）の天象と書かれていますが、なぜ 1 年ズレているのでしょうか？単なる記載ミスなのでしょうか？ここで注目すべきは劉邦の没年 BC195 年にも熒惑守心が起っていることです。火星は年初から 7 月まで、てんびん座でうろうろ

して、8月初にアンタレスに最接近します。病に伏した劉邦は「四月甲辰に崩じた」と記されていますが、この日を干支をもとにして求めると6月1日に当たります。漢の歴史官・天文官にとって初代皇帝の死には天からの予告があつてしかるべきと考えたのでしょう。しかし現王朝の創立者と前王朝の暴君と同じ天象のもとに亡くなったとは書きにくかったので、始皇帝没に関する天象を1年繰り上げて記したのかもしれません。

五星聚井

漢元年冬十月
五星聚於東井
沛公至霸上

漢書高帝紀

秦が滅び漢が興ころの最も有名な天文現象が『漢書高帝紀』に記載されています。

漢元年の冬十月に五惑星が井宿（せいしゅく）の東に聚まり、このとき沛公（はいこう）が覇上（はじょう）に到着した。

沛公とは後に漢の初代皇帝高祖となった劉邦のことで、覇上とは秦の首都咸陽（かんよう）近くの地名です。そこに彼が到着した時に水星・金星・火星・木星・土星が一堂に会したという現象です。『漢書天文志』にはこのことは

劉邦が天命を受けたしるしであると書かれ、彼の即位を正当化しています。井宿とはふたご座の南部に当たり東井とはふたご座の北からかに座にかけての天域で、ここには1等星2等星はありませんから見ごたえのある星空だったでしょう。

当時の状況は

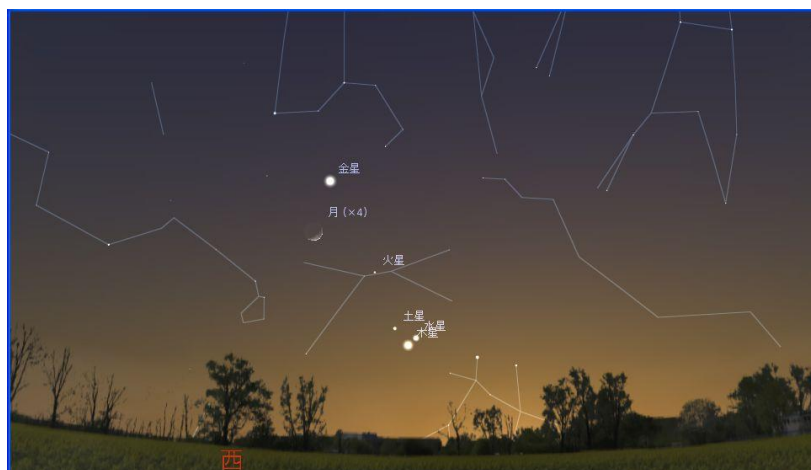
BC 210・・・始皇帝の死

BC 209・・・陳勝・呉広の乱、項羽や劉邦も挙兵

BC 206・・・秦王子嬰（しえい三世皇帝）劉邦に降伏

BC 202・・・劉邦即位

通常、漢元年とは **BC206** 年を指しますが、この年の秋から冬にかけて五惑星集合は起こらなかったことは以前から確かめられています。実際、木星・土星はふたご座周辺ですが、火星はずっと離れてみずがめ座・うお座辺りにいます。そこで数字の写し間違いではないかとか、五星とは単に **5** 個の星のことで五惑星を意味しないとか、そもそもこの記述は後世の捏造であるとか様々な議論がなされていますが 5),6), 果して秦末漢初に五惑星集合は起っていないものでしょうか？ **BC206** 年にこだわらず、**BC300** 年から **BC100** 年の間、五惑星が **25** 度以内に収まり、しかも太陽から離れて観望可能なものを捜してみます。その結果 **BC205** 年 5 月 30 日と **BC185** 年 2 月 26 日の 2 件が見つかりますが、劉邦の時代にふさわしいのは当然前者です。件の五惑星集合は **BC205** 年の 5 月末に実際に起こっていました。金星はやや離れていますが月が加わり、秦から漢の初期にかけての 300 年間で、これに匹敵



BC205 年 5 月 30 日 19 時 30 分

するような五惑星の集合は他にはありません。それどころか 854 年前に商周革命を示す時と同じ天象がほぼ同じ月日の同じ時刻に同じ方向で見えたのです。しかし半年ながらまたもや日付が食い違っています。

その原因は何でしょうか？以下は筆者の推測です。

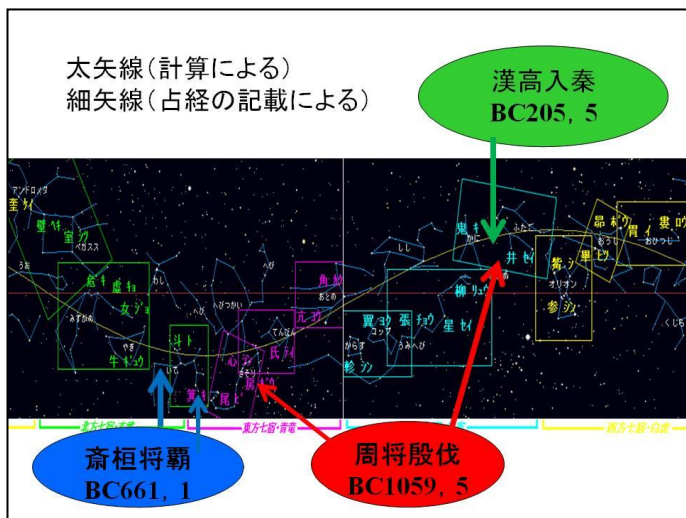
劉邦はせっかく首都咸陽に一番乗りしたものの、後から圧倒的多数の軍を引き連れて来た項羽に首都を明渡し山中に潜み、その後数年間、彼らは相争うことになる。BC205 年の 5 月といえば劉邦は項羽の前に連戦連敗を繰り返し、大陸を東へ西へと逃げ回っていたころだ。「現王朝開始の天命が下ったのだからそれにふさわしい時期でなければ」ということで漢の歴史官たちは太古の五帝の子孫ではない初めての皇帝となった劉邦にハクをつけさせるため、彼が英雄としてデビューした前年にこの天象を繰り上げて記載してしまった！

おわりに

唐の天文占星書である『開元占経巻十九』に五惑星集合はこれまでに 3 回起こり、最初が

「周将殷伐
五星聚於房」

で、2 回目は「斎桓将
覇五星聚於
箕」、そして
3 回目が
「漢高入秦
五星聚東井」
であると記
されていま



す。2 回目は春秋時代 (BC770~BC450 ころ) のことで、落ちぶれた周の王室を担いで諸侯の盟主になった「覇者」が 5 人いて、その最初が「斎の恒公」です。斎は山東半島を本拠地とする国で、初代は太公望といわれています。周室や諸侯が恒公を覇者として認めたのは

BC660 年頃で、BC661 年 1 月に確かに 5 惑星が集合しています。集合の場は箕宿（さそり座）ではなく、いて・やぎ座ですが、彼が「将に覇たらんとする」時期にはよく合致しています。

6000 年間の 5 惑星集合の計算において、密集度からするとトップは BC1953 年 2 月に、3 番目は BC1059 年 5 月に、そして 2 番目は 710 年 6 月末、玄宗の即位前夜に起こっています。しかも『開元占経』が書かれる少し前の天象というのが何やら胡散臭い気がします。則天武后によって中断された唐を再興した玄宗の即位は古の聖君による王朝開始と同じく天命によるものと言いたげです。惑星集合は王朝交代の兆しというのは出来すぎた話で、筆者はこんな相関を主張するつもりはもちろんありません。惑星集合も日食も多数起こっていますが、人々の記憶に残ったのは大事件の起こった時のものだけ。それを記録し後世に伝えたのは後世の天文官歴史官なのです。

参考文献

- 1)小竹文夫・武夫 「史記」 ちくま学芸文庫 (1995)
- 2)小竹武夫 「漢書」 ちくま学芸文庫 (1998)
- 3)作花一志・中西久崇 「天文学入門」 オーム社 (2001)
- 4)Meus S. D. ,and Meeus J. Journal of British Astron.Association 104,6,p293,(1994)
- 5)能田忠亮 「秦の改時改月説と五星聚井の辨」 恒星社厚生閣 (1943)
- 6)斎藤国治 「古天文学」 恒星社厚生閣 (1989)
- 7)平勢隆郎 「中国古代の予言書」 講談社新書 (2000)
- 8)荒木俊馬 「天文年代学講話」 恒星社厚生閣 (1951)
- 9)Schaefer B.E Sky&Telescope May 2000
- 10)作花一志 「天文教育」 No8 2002